

挿絵のあいのせりん
小説 story
筆祭競介

NIJIGAKI-YUWAKU
トリプル美少女に
抜け駆け誘惑されて
ハarem奉仕案件

立ち読み版

序章	ファーストキスは突然に	006
第一章	トリプル美少女のトリプルフェラ	020
第二章	おっとり聖母様と抜け駆け初体験	067
第三章	コスプレお姫様と誘惑ドレスプレイ	111
第四章	ツンデレ女王様とラブラブエッチ	153
第五章	ミスコンの景品が僕な件	196
第六章	トリプル美少女とご奉仕ハーレム	215
終章	今すぐ私を孕ませて	252

登場人物紹介

Characters



《潔癖症な学園の女王様》



ひやまさえ
燈山冴絵

抜群のカリスマ性を誇る東雲学園の現生徒会長。「女王様」という異名で呼ばれている。祐に対してちょっと態度がおかしくなることも。

フリーダムな残念姫



ティアリス・
エメラリア・クローデル

東雲学園に留学してきたクローデル国のお姫様。日本文化というサブカルチャーが大好きで、いろいろ残念な美少女。愛称はティア。



《意外と腹黒な聖母様》

うたがわまりあ
詩川麻里亜

祐の幼馴染みの三年生。前生徒会長で、今も先輩として生徒会を手伝うことがあるが、その目的は祐といっしょにいることだったりする。

さくらば ゆう
桜庭祐

補佐係として生徒会を手伝っている少年。ティアに一目惚れされたことをきっかけに、四角関係の真った大中!?

「……ティアまでテンション下げ下げなんですけど」

他の二人は相変わらず横線三本のしらせ顔である。

「あー、もうわかったわよ！」

すると一旦俯きモジモジしていた冴絵が、物凄い勢いでガバツと顔を上げてきた。

「そーなっちゃった責任、私が取ってあげるわよ！」

いつも凜としている瞳が見るからにテンパって、ぐるぐると渦を巻いている。学園の女王様クイーンが我を忘れてるのは明らかだ。

なにしろ彼女はそう叫んだ直後——パクン！

萎えたペニスを、先ほどの麻里亜と同じようにいきなり啜えてきたのだから。

「……ええっ!？」

「……さ、冴絵ちゃんが壊れた!？」

まさか生真面目な生徒会長が、こんな大胆な行動にでるとはこの場の誰も思っていないなかつた。

横線三本状態だった麻里亜とティアの両目と口が、今は全て真ん丸になっている。

お互いが同じことをしていた時とは明らかに違うリアクションで、怒りよりも驚きの方が勝っている声であり表情だった。

「そんなに続けてソコをパクンしちやらめええええ!？」

しかし唾えられた本人である祐だけは、先の二人の時と同じように盛大な愉悦の声を上げてしまう。

自分も彼女たちに負けないほど驚いているのだが、ペニスを唾えられた肉悦がそれを遙かに上回っていたからだ。

項垂れていた肉先を柔らかな唇に包まれながら、裏筋がヌルンとしなやかな牝舌に載った感覚に——ビビン！

冴絵の一言で萎えた肉棒が、その彼女の一口で再び限界まで膨張してしまう。

(信じられないよ！ あの燈山さんまで僕のをぱつくんしてるんだから！)

その衝撃が肉先で感じる快感に上乘せされ、愉悦の震えがいつまでも全身を駆け廻る。

「……ん？」

そんな中、驚きで両目と口を真ん丸にしていた左右の二人が表情をハッとさせた。

「ちよつとー！ どさくさに紛れて、結局、サエまでユーをパッくんしてる！」

「よく考えたら、壊れたんじゃないやなくて冴絵ちゃんも素直になったんだ！」

そして競う合うように、慌ててその美貌を祐の股間に寄せてきた。

「サエ！ 一人だけ、ユーにご奉仕するなんてずるいよ！」

「私にも祐クンをパッくんさせて！」

するとそれまでペニスをキュッと唾えていた冴絵が口を離し、いつもの調子で言い返す。

「祐の元気がなくなつたのは私のせいなんだから、私が元気にするのが筋でしょ！」
生真面目な生徒会長が男根を啜えてくれたのには本当にビックリしたが、その理由はやっぱり生真面目なモノだった。

そして再び、真上に向かって反り返る男根に三人の美貌が群がってくる。

「丸ごとパッくんするのは禁止！ 祐くんを独り占めするのはメッだよ！」

「わ、わかつたわよ！ それじゃあ——レロレロ、れろおおん。」

「テ、ティアも負けないんだから——ヌちゅレロれろむちゅううう。」

正面の冴絵が先ほどまで啜えていた肉先部分を舐め、左右の麻里亜とティアが肉胴部分に舌を這わせだす。

三人連続で経験した亀頭を丸ごと口で包まれるのとは、また違った気持ちよさだ。

プルンと柔らかな唇と違い、舌はよく動くし感触もしなやか。そんな味覚器官が三枚同時に、己の男性器に絡み付いているのだからたまらない。

（ぼ、僕、こんなことするの初めてなのに……いきなり三人がかりでオチンチンを舐めまわされちゃうなんて！）

肉体的に得られている快感だけでなく、視覚的な衝撃度も三倍である。

「ユーう。ティアのペロペロが——レロむちゅう……一番エロくて気持ちいいよね♥」

「はああん♥ 祐くんのそんなに気持ちよさそうなお顔見せられたら、舌が止まらなくな

つちやうよお♥

「祐のおちんちん♥ 祐のおちんちん♥ 祐のおちんちん♥」

しかも間違いなくこの学園でトップスリーの美少女たちが、こんなセリフを甘く囁きながら競うように舌奉仕をしてくれている。

三人の唾液で濡れ光る己のペニスに、形と長さが微妙に違う三種類の桃色舌がヌルヌルと絡み付いている光景の卑猥さだけで、童貞少年は今にもイッてしまいそう。

「くっ……ス、ズクっ……み、皆のペロペロが……つくうう……」

そして視覚や聴覚の刺激以上に祐を追い詰めてくるのが、やはり男根を直接襲う肉悦だ。ティアの舌は元気いっぱい、麻里亜の舌はねつとりと、そして冴絵の舌は一定のペーすでペロペロと——快感神経を直撃してくる三種類のしなやかなヌルつきに、腰の奥が激しく疼きだしている。

あまりの快感に思わず両目をギュッと閉じてしまっても、熱く込み上げてくる生理的な欲求は増すばかり。

「ご、ごめん！ も、もうイッちゃいそう！」

祐は正直にそう叫んでいた。

すると、ペニスを左右から舐めていた麻里亜とティアがピタッと舌の動きを止める。さすがに彼女たちも、これ以上踏み込むことに躊躇したようだ。

「ふえっ？　ろくに？」

そんな中、正面の冴絵だけは相変わらず一定のペースでペロペロと肉先を舐め続けている。どうやら生真面目な彼女だけは、男が『イク』ということが何を指しているのか知らないらしい。

「つくあ……だ、だめッッ！　ほんとにそれ以上わあああ！」

校舎の壁に背中を強く押し付けながら、祐はたまらず身悶えた。

そんな自分の姿に、舌奉仕を止めていた二枚の肉片が再び踊りだす。

「ユーに一番のご奉仕をするのはティアなんだから！」

「いいよ祐くん。気持ちいい所、いっぱいペロペロしてあげるから、好きなときにイッちゃって」

亀頭のくびれ部分を元氣いっばいにレロンレロンと舐めまわしてくるお姫様^{プリンセス}。

太い血管が浮く肉幹部分に、ねっとり舌を這わせだす聖母様^{マドンナ}。

ペニスを左右から対照的な勢いで舐められて、いつの間にか全身の毛穴から愉悦の汗が噴き出していた。

（す、凄いッッ！　二人ともどんどん舐め方が上手くなってる！）

ティアの舌は勢い任せのようできて勘が抜群に鋭く、祐が愉悦にビクッと震えるたびにそこを重点的に責めてくる。

対して幼馴染みの舌捌きはとにかく愛情たっぷりだ。舐める勢いはゆつくりしていて、それだけに密着感が半端ない。しかも時折、舌奉仕だけでは物足りないと言わんばかりにムチゆうツ、と唇まで強く押し当ててくる。

「な、なに？ 祐のが鉄の塊みたいにビキッてなったけど……って、ま、まあいいわ。これって元気な証拠みたいだから……」

——レロレロレロレロレロレロツツ。

そんな中、一人だけ男の生理現象がよくわかっていない冴絵は、ずっと肉先の小穴だけを舌先で舐め続けてくれていた。

彼女の場合、やはりこれも性格なのか口奉仕もとにかく生真面目。

一定のペースでひたすら舌を上下させている。

「っふああああ！ だからもうダメだってええええ！ 先っぽばかりそんなにずっとレロレロされちゃうとおおおお！」

男性器の弱点中の弱点である尿道の入り口を責めるのに、下手なテクニクなど必要なかった。

ひたすら愚直に舐め抜かれることで、弥が上にも肉悦が蓄積していく。

「も、もう本当に限界ッッ！」

思わず腰を引いて三人の口から逃げようとしたが後ろは校舎の壁。左右もティアと麻里

亜に腰をガシツと押さえられてしまいどうにもならない。

「だ、だめだよ！ 本当にもうイッちゃうんだって！」

「らからいいっていつれるれしょ」——レロレロんちゅんんっ！

「おもいつきりらしちつれいいよ」——むちゅん、ぬるぬるっ、むちゅん♥

左右の二人はますます舌奉仕の勢いや密度を増してくる。

「ら、らから……こんなときにどこにいくのよお」——ペロペロペロペロペロっ。

そしてただ一人、未だに事情のよくわかっていない冴絵は相変わらず肉先の一点舐め。

だからこそ、このままいけばどんな結末を迎えるのかは容易にイメージできてしまう。

ティアが激しくしゃぶりあげ、麻里亜がねつとりとねぶっている肉棒の中を、白濁の粘

液が一気に駆け抜け、冴絵が一心にレロレロと舐め続けている先端の小穴から——。

(マズいよソレは！)

とにかく自分がイッた際、一番の被害を被るのは間違いないく正面に跪く女王様だ。

しかしもう腰の奥では、肉悦の塊がとつくに引き返せないレベルまでパンパンに膨らみきっていた。

いまさらもうこの昂りを、吐き出さずに収めることなど不可能である。

「だ、だめえっ。だめえっ！ イクっ！ もうイッちゃう！」

自分を逃がさないように、左右からがっちり腰を掴まれている。それでも、僅かに動



かせる範囲でなんとか男根を横に逃がそうとした。

「あ〜ん」「ち、ちよつとお〜」「らめらよお」

すると己のペニスの動きに合わせて、とびつきりの美少女三人が舌を大きく出した顔のままついてくる。

「ツツツツツ!!」

その光景があまりにエロすぎた。

我慢の限界で踏ん張り続けていた少年を決壊させるのには、十分すぎる卑猥さだ。

「ああああああ！ ごめんなさい！ ほんとうにごめんなさいいいい！」

直前まで逃げようとしていた男根を、牡の本能で、最高のフィニッシュを迎えるために三枚の舌に向かつて突き出してしまふ。

今まで見たことがないほどパンパンに充血した亀頭に——ヌルっ、ヌルッ、ヌるるんっ！

三枚の美しい桃色舌が連続して触れ、唾液の熱いぬめりと共に、爆発寸前の男根にトドメの肉悦をもたらした。

「ああああああ！ イッチャうううう！ いっっちゃうううううう！」

三人がかりの口奉仕でヌルヌルのドロドロになった肉棒の内側を、灼熱の塊が凄まじい肉悦を撒き散らしながら一気に貫き——ドギュどりゅどぶん！

高密度な白濁液となつて盛大に噴出する。

「きゃん!? つつ……ふええええ!?」

初弾の直撃を舌でモロに受けた現生徒会長が、普段の凛々しさからは想像できない裏返った声を上げる。

「ふふあ!? はああん♥」

「ユーの熱い♥」

そんな冴絵と舌を並べるようにして肉先を舐めていたティアと麻里亜は、最初こそ驚きの声を上げたが、あとは嬉々としてその舌や美貌で白濁液を受け止めてくれた。

——ドギユドぶどりゅ、どぶどぎゅッ、ドブどぶどりゅッどぶどびゅン!

大量に噴出するザーメンが、舌を出した三人の顔を次々に白く染めていく。

美しいモノを己の排泄液で心ゆくまま汚す——その背徳的な刺激に後押しされ、牡の脈動は長く続いた。

そして祐は全てを吐き出し終えると、そのままカクツと後ろの壁にもたれかかる。

「……い、今のが……イクってことなのね……」

と茫然としている冴絵。

「このこつてりしてて熱いのが、祐クンの赤ちゃんの種なんだ……はああん♥ なんだか

腰の奥が疼いてきちゃう♥」

「ティア……ユーにぶっかけられちゃった♥ ユーにマーキングされちゃったあ♥」

「……う、うん」

「そして頬をほんのりと桜色に染め、大きな瞳の縁に大粒の涙を浮かべながら、小さくコクンと顎を引いた。

普段の天真爛漫な言動とは正反対の、こちらに縋り付くようなそのリアクションに、祐の頬が熱く火照る。

（な、なんだか、今のティア……めちゃくちゃ可愛いかも……）

しかもその可愛さが、いつもと違い、思わず守ってあげたくなる類いの可愛さなのだ。

「ねー、ユーウ。ティアに、痛い痛い飛んでけのチューしてえ」

しかも甘えるような声と表情で、こんなことまで言ってきた。

それにしても異国のお姫さまのクセに、日本のオタク用語だけではなく、こんな言葉まで本当によく知っている。

「わ、わかった。それじゃあ——んー」

「はああん♥ ユー♥ だいすきだよお♥」

祐がゆっくり唇を重ねると、彼女から顔を僅かに斜めにして深く唇を密着させてきた。

「んん!!」

そして、しなやかな彼女の味覚器官が、こちらの口内にヌルリと入り込んでくる。

びっくりして両目を見開いたが、相手はうっとり瞳を閉じたまま、積極的にこちらの

口内まで舐めてくる。

(わわわわわ！ なにコレ！ 凄く気持ちいい！)

彼女の舌がこちらの舌に絡み付くと、後頭部まで痺れるような快感が走る。

ディープキスをするのはこれが初めてだが、まさかこんなに気持ちよいとは全く想像していなかった。

祐はティアに覆いかぶさった姿勢のまま、両肘をベッドにつけて身体を安定させ、改めて深く唇を重ねる。

そうして相手がチロチロと踊らせている舌に、こちらからも積極的に舌を絡めていく。

——レロぴちゃ、れるおおん。ヌルヌル、くちゅん。

互いの舌を舐め合う湿った音が、部屋の中に充滿し始めた。

すると、破瓜直後から物凄い強さでペニスを引き絞っていた膣壁たちが、くんやりと程よくトロけだす。

ロストバージンした直後は明らかに痛みによって力んでいた彼女の全身も、今は官能で小刻みにヒクヒクと震えている。

「んっ……んんんっ——っぶふああ♥」

息継ぎをするため一旦キスを解いて顔を上げると、ティアがトロンと蕩けた表情をしてポーツとこちらを見上げていた。

「ふああ♥ 本当に痛いのだつかに飛んでっちゃったよお♥ ユーのペロチューが気持ちよすぎてええ♥」

「僕もだよ！ ティアとのキス、メチャクチャ気持ちよかった！」
お姫さまよりも明らかに自分の方がテンションが高かった。

そして彼女相手に己の感情をこんな素直に口にするのも、初めてかもしれない。

ティアもそれが嬉しかったのか「ユウ♥」とこちらの背中をギュッと抱きしめてくる。
「う、動くよ——ツツツくわああ……」

祐は彼女の上に覆いかぶさった姿勢のまま、ゆっくりと己の腰を引き始めた。

くんやりと蕩けた膣壁たちが男根に吸い付いてくるような感覚に、思わず愉悦の音が漏れてしまう。

「はああああん♥ ちょっとユーが動いただけなのに、身体が内側から捲り返っちゃいそうだよお♥」

そしてティアの喘ぎ声も、こちらに負けないぐらい官能的で、そして甘いモノだった。少なくとも痛みを我慢しているようなものでは全くない。

祐はもうロストバージョンに伴う痛みの心配をするのをやめて、二人の喜びのためだけに、ゆっくりと腰を沈めていった。

縦筋一本な牝裂の中に、改めて深く己の肉棒がぬぶぬぶと埋まっていく。

お姫様プリンセスの中はとにかく大量の愛液に溢れていて、心地よい抵抗感と共に祐を丸ごと受け入れてくれる。

「はうううん♥ ユーとお、ほんとうに一つになってるう♥」

ティアの可愛い喘ぎ顔に激しく興奮しなから、祐は腰を揺すりだした。

——ぐちゅん、又チュ、くちゅつ、ぬるグチュ、ずくちゅん。

ペニスの付け根から肉傘までの、決して長いとは言えないストロークで。

（うわああああ！ こ、この独特の感覚わああああ！）

ティアは未だ太腿の半ばまでストッキングを履いたままのため、腰の横に当たるナイロンの肌触りが心地よい。

加えて下腹にサワサワと触れるガーターベルトの感触も、ヌルヌルでトロトロなセックスの快感に独特のアクセントをもたらしている。

そもそもティアは未だにドレスを着たままで、ハイヒールすら履いたままだ。

その大きな胸もドレスの中に押し込められていて、自分の動きに合わせてタプッタぷつと小刻みに揺れている様子が、服の隙間からしか見えない。

なのに一番大切な所を覆う下着だけは脱ぎ、今こうして自分と一つになっている。

（なんだかコレって、めちやくちやエロいよ！）

性器同士の交わりによる直接的な肉悦に加え、『お姫さまのコスプレ』をしたティアと

セックスしているという視覚的なインパクトが少年の興奮を更に煽る。

慎重だった腰の動きが、瞬く間に獣染みていく。

「んはああああん！ す、凄いッッ！ 激しくて、奥まで届いてて！ んはああああん！」

ティアが両手をこちらの首筋に回し、グイッと顔を自分の方に引き寄せてきた。

そして激しい喘ぎ声混じりに「ユウー！ ゆうう！」と、こちらの口元にむしゃぶりついでくる。

祐の下唇をその愛らしい唇で挟み、厚みのある部分を必死にペロペロと舐めてきた。

舌を舐め合うのとはまた違う、うなじの辺りがゾクリと震える快感が走る。

そしてなにより、まるで大好きなご主人さまに甘えてじゃれつくペットのようなお姫様プリンセスの行動そのものが、少年の欲情を極限まで煽りたてた。

「ティアっ！ ていあああッ！」

甘い声で彼女の名前を連呼しながら、いてもたってもいられずに思わず大きく舌を出す。

——レロろおん、くちゅちゅル、レロれるくちゅん！

二枚の肉片は互いの唾液が混じり合い白く泡立つほどの激しさで、ヌルヌルと宙で絡み合う。

熱い蜜壺との交合による肉悦と、互いの味覚器官を熱烈にねぶり合う快感が、少年の全身に官能の閃光を幾度も激しく撒き散らす。

「つくふああ！ も、もう限界だよお！」

祐が外出しするため腰を引こうとしたら、それを察知したティアが両脚をこちらの腰に強く絡み付かせてきた。

「ちよっ!? だ、だめだよ！ もうイッチャいそうなんだから！」

「だめじゃないよ！ 最後までティアのなかに入れて！ 一緒にいこう！ 最後まで！」
「で、でもツツ!!」

頭ではヤバイと思いつつも、腰の動きが止められない。

そして視界に入ってくるのは、自分の動きに合わせて揺れる可愛らしくも高貴な美貌。パーティー会場で見せつけられた完璧なお姫さま姿のまま、一番大切な所を覆うショーッだけ脱いで、庶民な自分に激しくその女体を貫かれて激しく喘ぎ続けている。

その官能的すぎる光景が、少年の理性を焼き切った。

「うわああああああ！ イクよ！ 本当に！ ティアの中でイッチャうからね！」

気付いた時にはそう絶叫し、最高のフィニッシュを求めて、狂ったように腰を弾ませていた。

トロトロに蕩けた膣壁たちと激しく交わり、高貴な種を宿すべき姫の子宮を本能のまま突きまくる。

「あああんツきてええええ！ ティアのなかに、ユーのぜんぶをはきだしてえええええ！」

心の底から中出しを乞うお姫様の絶叫を聞きながら、ドレスの上から小刻みに揺れる胸を最後に掴み、全身を限界まで息ませた。

——ドリユン！　どぎゅどぶつ！　どりゅドブツどぶん！

極限まで膨張したペニスの中を、灼熱の粘液が内側からぶち抜くように迸っていく。

直後、ティアが祐の腹の下で、アップにまとめた後頭部の髪をベッドに叩きつけるようにして弓反った。

「んはああああ！　でてるうううう！　ゆうううのおちんちんがあああ、ティアの中ではくはつしてるうううう！　んああああ！　テ、ティアもイクつ！　あああああ！　イチちやうううううう！　ユーといっしょにイチちやうううううう！」

そしてドレスに包まれたままの全身を、雷にでも打たれたようにビクビクビクッと痙攣させ始める。

ストッキングを履いたままの両脚も宙を漕ぐ格好のまま激しく震え続け、限界まで反り返っている左の足の甲から、ハイヒールがとうとうポトリと脱げ落ちた。

「あああ……つくふああ……つくふああ……」

祐は全てを出しきると、息まっていた全身から力が抜けて、そのままがつくりとティアの上に覆いかぶさる。

未だ絶頂の余韻でヒクンヒクンと突発的に身を震わせているお姫様と超至近距離で見つ



装はパーティー時と変わらない。

しかし祐の方はズボンと下着を脱いでいるため、もうフォローのしようがなかった。そんな自分の姿を見て瞳を釣り上げたのは、先日、初体験をしたばかりの幼馴染み。

「祐くん！ もう浮気するなんてひどいよ！」

「浮気じゃないもん！ 本気だもん！ マリアよりもティアの方が一番になったんだもん！ ペロチューだって、パイズリだってティアといっぱいしちゃったんだからね！」

「な、ななななななんですってー！」

いつもはマイペースなあの麻里亜がふわふわな栗毛を逆立てて、祐の腕に抱きついてきたティアと、ワーワーキヤーカーと諍いだす。

そんな中、いつも口論の片側にいるはずの冴絵が、その争いの中に入っていかない。

顔を軽く俯けた状態で、ゆらりと祐に近づいてくる。

二人の口論に気を取られていたのと、そのあまりの物静かさで、彼女が隣に立つまでその存在を忘れていたほどだ。

「……祐」

「……ふえっ？」

そんな冴絵に名前を呼ばれて、横を向いた直後である。

——バチーン！

これはデレなのだろうか？ それとも素の彼女なのだろうか？

いずれにしろ祐は凄まじく興奮していた。

この身体に渦巻く激しい欲情を、今すぐこの可愛い女の子に向かって爆発させたい。

しかし相手はロストバージン直後だ。

優しくすると言った手前、獣欲の赴くまま腰を突きまくるわけにもいかない。

こうなったら――。

「キスしよう！」

自分の興奮と相手の痛みを緩和させる方法を、コレ以外に知らなかった。

祐は後ろから彼女の顎を掴むと、らしくない強引さでこちらに顔を向けさせて、

「ふえっ？ あ、あの祐――ンンっ!？」

未だ破瓜の衝撃で心ここにあらずな唇を塞ぐ。

そして驚きに目をパチクリさせる冴絵と超至近距離で見つめ合ったまま、彼女の口内に

勢いよく舌を躍り込ませる。

そして熱い口腔の中、己の舌を泳がせて少し強張り気味な相手の味覚器官をぬるりと舐

めた。

（うわぁ！ やっぱりペロチュー凄い気持ちいい！）

体格的にティアより勝っているだけに、舌に厚みと長さがあつて、より広い面積を密着

させられる。

それだけに、後頭部が痺れるようなディープキスの快感がより大きい。

「んんん!!」

祐から積極的に舌を絡めていくと、驚きのためか彼女の瞳が一瞬だけ大きく見開かれ、そしてすぐにトロンと溶けていく。

「んふうう……ゆうう……ンンっ……ゆううう♥」

そして甘い吐息混じりに、彼女からも味覚器官を絡めてくる。

——レロむちゅ、れろおおん。くちゅれろむちゅうう。

二枚の舌が動きを合わせて、互いの舌を何度も執拗にねぶり合う。

時折、こちらの振り抜くような動きに相手の舌がピタリと合って、勢いよく擦れ合う際には眉間の内側が白く瞬くほどの快感が弾ける。

そんな激しくも濃密なディープキスをしていたら、破瓜直後の強烈な女性器の締め付けが次第に収まってきて、膣内の細やかな感触を認識できるようになってきた。

「どう？ まだ痛い？」

祐はおもむろにヌルンと舌を抜き、それでも唇同士が触れ合うぐらいの至近距離のまま相手に訊ねる。

「……もう……大丈夫みたい……で、でも」

そう答えた冴絵はもつとキスを続けたいのか、彼女の方から唇を重ねてきて、すぐに舌まで入れてきた。

祐もすぐにそれに応じ、下半身で繋がったまま、再びねちっこいディープキスをたっぷりと貪り合う。

そして存分に互いの舌と唇を味わい合った後、今度は冴絵の方から「ぷふぁ」とキスを解いてきた。

「……優しくしてくれて、ありがとうね。……だからあとは私の全部……祐の好きにしたいよ♥」

そして恥じらいと嬉しさの入り混じった表情を浮かべながら、再び「ちゅっ」とキスをしてくる。

しかしそれは、先ほどまでの互いの口腔を貪り合うような貪婪なものではなく、恋人に甘えるのが恥ずかしくって、それをごまかすようなフレンチキスだった。

「ツツツツツ!!」

いったい今日の女王様^{クイーン}は、どこまで男心を刺激すれば気が済むのだろう。なによりたまらないのが、その一切が計算ではなく彼女の素である所。

「も、もう！ ほ、本当に冴絵の全部、僕の好きにしちゃうからね！」
彼女の背中に覆いかぶさったまま、胸を思いつきり驚掴みにする。

「ふあ？ ゆ、ゆう？」

いきなり上半身の密着がなくなった女王様クワイーンが、喘ぎ声に混じって戸惑いを漏らす。

「うわああ……こ、この眺めは……」

反対に祐の方は、感嘆の声を上げていた。

彼女は未だ制服姿のままショーツだけ脱いで、後ろから自分に貫かれている。現生徒会長が制服姿のまま、一番大切な部分を覆う下着だけ脱いで自分に抱かれているシチュウが、妖しい背徳感を掻き立てる。

お姫さま姿のティアと、ドレス姿のままエッチした時に覚えた興奮と同じだ。

そしてなにより、剥き出しになっている冴絵の下半身そのものがたまらない。

「ああん♥ そ、そんなところまで撫で回さないでえ。か、感じすぎちゃうから——はあ
ああああん！」

運動能力の高さを容易に感じさせる引き締まった太腿。

まるで茹でたての卵のようにツルンとした二つの丸み。

バックの体位で繋がったまま、彼女の下半身に掌を這わせてその感触も全て味わう。
そして両手がウエストのくびれを掴んだ時、

（うわっ!? ほ、ほっそ〜）

驚きで彼女の下半身を這い回る手の動きが止まった。

先ほどまでこの手で撫で回していた太腿や臀部とは対照的に、限界ギリギリまで削ったような鋭いくびれ方をしている。

この腰、この尻、この格好——。

これほどの女体と交わりながら、それでも理性的でいられるほど、祐は女慣れしていなかった。

——ヌぐちゆるるるるるるッ。

鼻息荒く、男根の動きを再開させる。

彼女の全てを味わい尽くそうと、肉棒の根本から亀頭の付け根までの最長ストロークで腰を振る。

「はあああん。こ、擦れてるう。わ、私の中の気持ちいいところに——んはああん！祐のでっぱりがズリンズリンって、おへその裏側に当たってるううううう」

が、そんな風に自分の動きをコントロールできていたのもほんの束の間。

己の下腹に当たる柔らかな牝尻の弾力と、蜜壺を貫く際に発生する極上の愉悦が、少年の動きをすぐに加速させていく。

「ああああ！止まんない！気持ちよすぎて腰の動きが止まんないよおおお！」

そしてなにより、この体位だと腰の動きがめちゃくちゃスムーズなのだ。

冴絵が四つん這いで、自分が膝立ちの姿勢で結合しているために、腰の細かな位置を互

いに調整できる。

それだけに、牡牝の性器の芯をピッタリと合わせることが可能だった。少なくとも、今まで経験してきた騎乗位や正常位よりも深い結合感である。

「くふああ！ す、凄いコレ……たまらない！ たまらないよ！」

興奮がそのまま身体の動きに直結する。

——パンパンパンパンパンパンパンっ！

気付いた時には冴絵のウエストをがっちりと掴み、彼女の尻が逃げないように固定してがむしゃらに腰を突きまくっていた。

冴絵の小振りな丸いヒップが己の下腹部に当たるたびに、乾いた音を響かせて扇情的にタプタプ弾む。

その先では制服を着たままの上半身が身悶えて、赤毛のポニーテールが揺れている。

下半身で爆発している肉体的な快感に、この視覚的な刺激も加わり、少年は瞬く間に追い詰められた。

「あああん！ 凄いッッ！ 何かくるううう！ 腰の奥からあああ！ 子宮の奥からあああ、なにか熱い塊が迫り上がってくるみたいで——んはあああああ！」

しかし自分が限界に達する前に、相手のビクつきが半端なくなってきた。

そして彼女の喘ぎ声には、明らかに戸惑いの色が滲んでいる。

(ひよつとしてセックスだけじゃなくって……イクのも初めてとか!?)

思えば自分に初めてフェラをしてくれた時、冴絵だけは『男がイク』ということの意味を知らなかった。

彼女は男の生理を知らなかったわけではなく、そもそも性的なことに関しては完全に無知だったのかもしれない。

保健の授業で男女の違いや性について最低限教えられていても、教科書で『イク』という概念までは説明していない。

「まさか初めてなの!? 冴絵はイクのも初めてなの!?’

ウブで生真面目な性格の彼女なら、十分に考えられることだった。

「はあああん! こ、これがイクってコトなのおおお! ああつ、らめえええ! 気持ちよすぎて意識がどっかに飛んでイッチャいそうだよおおお!’

やはりそうだ。

現生徒会長は、自慰の経験すらないに違いない。

ロストパーズンだけではなく、女王様クイーンの初エクスタシーまで自分がもたらす喜びに、祐もとうとう限界に達した。

「僕ももうイッチャうからあ! 一緒にいこう! 冴絵と僕で一緒にいいいい!’
獣の体位で交わりながら、獣のようながむしゃらな突入を開始する。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!